



年間第 4 主日 (ルカ 4:21-30)

医者よ、自分自身を治せ

「この人はヨセフの子ではないか。」会堂に集まった人々の驚き怪しむ声です。都エルサレムの、高貴な家の子、もしそうであったなら人々は納得したのでしょうか。「ヨセフの子」ということばの響きは、決してよい響きではありませんでした。

「どこそこの家の子」と呼ばれているとき、それはおそらく「近所の家の、取り立てて珍しくもない子」ということでしょう。会堂に集まった人々は、どこにでもいる家の者がイザヤの預言したことばを実現する者とはとても思えなかったのです。

「どこにでもいる・ある」と聞くと、次の聖書の言葉を思い出します。「聖書にこう書いてあるのを、まだ読んだことがないのか。『家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった。これは、主がなさったことで、わたしたちの目には不思議に見える。』」(マタイ 21・42)

捨てられて踏みつけられるような石が大切な基礎の石になるのは信じがたいし、大工にとっては不都合です。イエスは人々から不都合な存在とみなされ、山の崖から突き落とされそうになるのです。

先週私は夢を見ました。最近よく違う場所で暮らしている夢を見るのですが、そういう夢の一つでした。私は福岡の大神学院に今の年齢のまま再度入学して授業を受けていました。最初の印象は「何で俺がまた勉強し直さんといけんとや？」と腹を立てていたのです。

教授陣は 35 年前のままでしたが、いざ授業を受けてみると、35 年前の内容から研究はアップデートしてしまっていて、新鮮な驚きをもって学ぶことができました。いったんは「こんな生活は受け入れられない」と憤慨したのですが、偏見を捨てた時、結果は違って見えたのです。

会堂に集まった人々もイエスを「その辺の人」と思っていたので憤慨したのですが、「すぐ隣の人が、もしかしたら預言を実現する人かも知れない」偏見を捨ててそう思えば、結果は違って見えたことでしょう。今週の朗読は先週の続きですが、神のことばの完全な答えであるイエスを受け入れるためには、前提なしに心を開く必要があります。

今週持ち帰って欲しい呼びかけは「医者よ、自分自身を治せ」ということです。自分自身に謙虚に向き合わなければ、心を開いてイエスのみことばに耳を傾けることはできません。例えば人柄を見るのに「あの人はこういう性格なのだ。それ以外の可能性はない」と決めてしまいがちです。その人の人柄を固定しているのは私の偏見かも知れない。私は、そんな私自身を治療する必要があります。

神のことばが私の心に豊かに宿るために、イエスの一つひとつのことばに全身全霊を傾けましょう。「ここには得るものは無い」と捨てた石を、私より遅れて洗礼を受けたあの人この人が拾い上げて豊かになるかも知れません。憤慨した人々の間を通り抜けて立ち去られたイエスを、「さようなら」と見送るのではなく「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます」(ヨハネ 6・68) と言えますように。